

第 1 章 教科等横断的な視点での教育課程の編成

第 1 節 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編では、生徒に「生きる力」を育むことを目指し、学校教育全体及び各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱を踏まえながら、明確にすることが求められています。

育成を目指す資質・能力の具体例については、学習指導要領に基づき、各学校において、生徒や学校、地域の実態に応じてどのような資質・能力を図っていくのかを明らかにしていく必要があるとしています。変化の激しい社会の中で、主体的に学んで必要な情報を判断し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を解決していくための力が必要になります。このような力を生徒一人一人に育てていくためには、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身に付けた力を統合的に活用して現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程を見渡して育てていくことが重要になります。

（１）各教科等で身に付ける資質・能力

各教科等において何を教えるかという内容は重要になります。その内容を学ぶことを通じて、「何ができるようになるか」を意識した指導が求められています。「この教科を学ぶことで何が身に付くのか」という、各教科等を学ぶ本質的な意義を理解し、教科等ごとの枠の中だけではなく、教育課程全体を通じて、教科等横断的な視点をもってねらいを具体化したり、他の教科等における指導との関連付けを図ったりしながら、幅広い学習や生活の場面で活用できる力を育むことを目指すことが求められています。

（２）学習の基盤となる資質・能力

人は生涯にわたって学び続け、その成果を人生や社会の在り方に反映していくようになります。そうした学びの本質を踏まえて、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力を育てていくことが大切になります。そのためには、生徒の発達の段階を考慮しながら、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことが求められています。

ア 言語能力

言葉は、生徒の学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものです。教科書や教師の説明、様々な資料等から新たな知識を得たり、事象を観察して必要な情報を取り出したり、自分の考えをまとめたり、他者の思いを受け止めながら自分の思いを伝えたり、学級で目的を共有して協働したりすることができるのも、言葉の役割に負うところが大きいと言えます。

言語能力を育成するためには、全ての教科等においてそれぞれの特質に応じた言語活動の充実を図ることが重要です。特に国語科の果たす役割が大きく、国語科を要としつつ教育課程全体を見渡した組織的・計画的な取組が求められます。また、外国語科及び外国語活動においても国語科と指導内容や指導方法を連携させて、言語能力の効果的な育成につなげていくことが重要です。

イ 情報活用能力

情報活用能力は、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力です。将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要になります。また、情報技術は人々の生活にますます身近なものとなっていくと考えられます。そうした情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにしていくことが重視されています。

ウ 問題発見・解決能力

各教科等において、物事の中から問題を見だし、解決の方向性と解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現が求められています。各教科等の問題発見・解決に必要な力を身に付けられるようにするとともに、総合的な学習の時間における横断的・総合的な探究課題や、特別活動における集団や自己の生活上の課題に取り組むことなどを通じて、各教科等で身に付けた力が統合的に活用できるようにすることが大切になります。

（３） 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に照らして必要となる資質・能力を、それぞれの教科等の役割を明確にしながら、教科等横断的な視点で育てていくことができるよう教育課程を編成することが求められています。これらの資質・能力として、

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力
- ・豊かなスポーツライフを実現する力

などが考えられます。

各学校においては、生徒や学校、地域の実態及び生徒の発達の段階を考慮して、学校の特色を生かした目標や指導の重点を計画し、教育課程を編成・実施していくことが重要になります。

※参考文献：「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説【総則編】」

平成 29 年 7 月 文部科学省

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会

第2節 教科等横断的な視点を取り入れた授業の実施

(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの学びがそれぞれできているかという視点に立った授業改善を行うことが重要です。各教科等の特質を踏まえ、具体的な学習内容や生徒の状況に応じて、これらの視点の具体的な内容を手掛かりに、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることが求められています。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善について、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3つの学びの視点と「授業者」「学習者」の視点から以下の表にまとめました。

	授業改善に向けた『学習者』の視点	授業改善に向けた『授業者』の視点
主体的な学び	・学ぶことに興味や関心を持つ ・自己のキャリア形成の方向性と関連付ける ・見通しをもつ ・粘り強く取り組む ・自己の学習活動を振り返って次につなげる	・既習事項を振り返る ・具体物を提示して引きつける ・子供が自らめあてをつかむようにする ・子供が自分の考えを持つようにする ・子供の思考を見守る ・子供の思考に即して授業展開を考える ・子供の考えを生かしてまとめる ・思考を交流させる ・交流を通じて思考を広げる ・協働して問題解決する ・その日の学びを振り返る ・新たな学びに目を向けさせる
対話的な学び	・子供同士の協働を通じ、自己の考えを広げ深める ・教職員との対話を通じ、自己の考えを広げ深める ・地域の人との対話を通じ、自己の考えを広げ深める ・先哲の考え方を手掛かりに考える	・思考を交流させる ・交流を通じて思考を広げる ・協働して問題解決する ・板書や発問で教師が子供の学びを引き出す
深い学び	・各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせる ・知識を相互に関連付けてより深く理解する ・情報を精査して考えを形成する ・問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう	・資質・能力を焦点化する（つきたい力を明確にする） ・単元や各授業の目標を把握する ・ねらいを達成した子供の姿を具体化する ・教材の価値を把握する ・単元及び各時間の計画を立てる ・目標の達成状況を評価する

この表では、主体的・対話的で深い学びを実現するためには授業者の視点による改善を行うだけでよいことを示しているのではなく、授業者の視点による改善が学習者の視点による学びを促すことが重要であることを示しています。授業者の授業改善に向けた努力は、それ自体を目的とした場合には、子供の思考や関心から遊離した授業になる可能性があります。授業者の視点と学習者の視点は、どちらか片方が重要というのではなく、双方を往還することが必要なのです。すなわち、授業者による授業改善の視点と学習者における学びの改善の視点を往還させることが、主体的・対話的で深い学びの実現につながると言えます。

さらに、主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではありません。単元や題材などの内容や時間のまとまりを通して、授業改善を進めることが重要です。単元や題材など内容や時間のまとまりをどのように構成するかというデザインを考えることが、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を考えることに他なりません。

※参考文献：「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」

令和2年6月 国立教育政策研究所教育課程研究センター

（２）教科等横断的な視点に立った評価と留意事項

学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要です。したがって観点別学習状況の評価の記録に用いる評価については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要です。

観点別学習状況の評価になじまず個人内評価の対象となるものについては、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要です。特に「学びに向かう力、人間性等」のうち「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進捗の状況などを積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要です。

言語能力、情報活用能力や問題発見・解決能力など教科等横断的な視点で育成を目指すこととされた資質・能力は、各教科等における「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映することとし、各教科等の学習の文脈の中で、これらの資質・能力が横断的に育成・発揮されることが重要です。

※参考文献：「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」

4. 学習評価の円滑な実施に向けた取組について（２）（３）（４）抽出